

発刊にあたって	1
これまでの研究の経緯	1～2
研究大会を終えての成果と課題	2
次期研究に向けての取り組み	2～3
教科等の研究実践	4～8
総合学習シャトル 総合学習 CAN	9～11
研究文化の醸成	12
あとがき	12

香川大学教育学部附属坂出中学校 発刊

平成 31 年 2 月 20 日



校長 高木 由美子

発刊にあたって

早春の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申しあげます。

本校では、「『学ぶこと』と『生きること』をつなぐ『ものがたり¹』」というテーマについて、全教員一丸となって取り組んでいます。「ものがたり」のもつ力を活かした授業によって、生涯学び続けようとする強い学習意欲をもった生徒の育成をめざし実践を続けてきました。平成 30 年に開催された研究大会では、サブタイトルを「主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして」と掲げ、「深い学びを生み出すための問いは適切であったか」などの課題を各教科それぞれの切り口で掘り下げ、主体的な学び、対話的な学び、深い学びが具現化しているか、「応じる」ことができる生徒は育成されているなどを、実践を通じて検討してきました。

次に私たちが着目したのは、感性にひびく授業を展開するための「自己に引きつけることへの有効性」や、「題材のドミナント・ストーリーの変容をいかに明確化するか」についてです。教材開発、単元構成、研究授業の振り返りを通じてこれらを明らかにしてまいります。

また、平成 30 年度は、文部科学省研究開発学校の指定を受け、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力で解決していく異学年合同の「共創型探究学習」を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発を行ってまいりました。すなわち、総合学習 CAN について、伝統を生かしつつ、新しい部分を取り入れて、さらに進化した「総合学習 CAN」を提案できるよう模索しているところです。

本号では、研究テーマの概要やめざす学習論、実際の授業で実践と評価を可能とするための取り組み、支える環境・学校文化などに言及しながら、各教科・領域ごとの内容を掲載いたしました。ご一読のうえ、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いです。また、皆様には今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申しあげ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

研究主題

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」

- 主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして（第一次終了） -

1 これまでの研究の経緯

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に授業実践及びカリキュラムの研究を進めてきた。平成 26 年度大会からは、ナラティヴ・アプローチ²としての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う

¹ 語られた「物語」だけでなく、「語る」という行為そのものにも着目している。この「語る」という行為によって、学びの意味や価値を実感し「自分自身について語る」ことを通して自己形成をするという「学習行為論」を重視したことで、2013 年より本校独自に「ものがたり」とひらがなで表記している。

² ナラティヴ（語り、物語）という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。（野口裕二『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009）本校は、振り返りを語りの視点から捉え直す自己理解法とらえている。

学習指導法を「自己物語³」の視点から追究する「ものがたり」の授業を提案した。28年度大会では、学習者の個の文脈を意識した単元構成と問い合わせを設定し、互いにクリティカルに聴き合い問い合わせ中で新たな「ものがたり」を語り直す「個が響き合う共同体⁴」を提案した。今年度は、「深い学びを生み出すための問い合わせのあり方」、「聴き手を育てる教師のかかわり方」を通して構築される「主体×主体の関係⁵」が、「ものがたり」の授業における深い学び⁶を生み出すことを提案した。

2 研究大会を終えての成果と課題

研究大会の実践を通して表出された具体的な生徒の「語り」をもとに、「ものがたり」の授業としての成果と課題を、図1中の4つの視点に基づいて確認した。その概要は、以下の通りである。

(○…成果、●…課題)

視点1 「学びを振り返り、語り直す場」について

- 学びを振り返り、語り直す場を設定することで、学ぶ意味や価値を実感する生徒がいた。
- 学びを生徒の「ものがたり」につなげる振り返りのさせ方にさらなる工夫が必要である。

視点2 「教師の願い」について

- 学習前後の生徒の変容を意識し、それらをより明確化することが有効である。
- 教師の願いをどう明確にしていくかについて、さらに具体に踏み込む必要がある。

視点3 「互いの考え方を語り合う場の設定」について

- 対話を通した学びが定着しつつあり、「応じる」取り組みと教師のかかわりは有効であった。
- 小集団の対話だけでなく、全体の場面での対話をより活性化させていく必要がある。

視点4 「単元構成や問い合わせ」について

- 生徒の思考の流れや文脈に沿った単元構成や問い合わせの設定は有効である。
- 学びを自己に引きつけて意味や価値の実感が表出されるような単元構成について、さらに工夫が必要である。

3 次期研究に向けての取り組み

前回までの研究を継承し、「ものがたり」の授業を通して、生徒が学んだことの意味や価値を実感できる授業を引き続きめざしていく。今期は、研究大会の成果と課題を踏まえ、「生徒の題材に対するドミナント・ストーリー（学習前の題材に対する考え方）の把握と、その変容を明確化すること」、「生徒の自己形成につながる『自己に引きつけた語り』を生み出すための手立て」という視点を特に重視して「ものがたり」の授業の実践に取り組んでいる。

(1) 生徒の題材に対するドミナント・ストーリー（学習前の題材に対する考え方）の把握とその変容を明確化すること

野口（2009）は、ドミナント・ストーリーを「ある状況を支配している物語という意味で用い

³ 「自分自身について語る」ことを通して自己の生成と変容を理解すること。

⁴ 「個が響き合う」とは、生徒が主体となり互いの学びの声が活かされている状態を意味している。また「共同体」とは、個がそれぞれの学びの主体となり、積極的に仲間とかかわる中で、新たな「ものがたり」を生み出していける、言わば「ものがたり」の深化をはかるための集団である。

⁵ 自らの意志に基づいて「人・もの・こと」にかかわろうとする学習者同士が、対等な立場で、他者を受容しながら聴き合い、語り合う関係。

⁶ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。（文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』、2017、77頁）

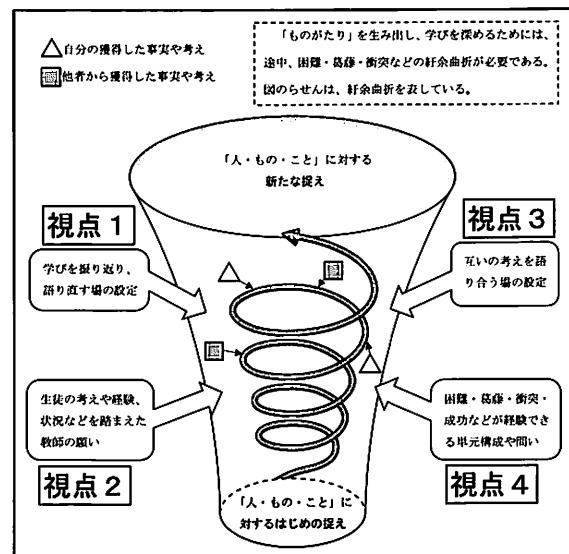


図1 「ものがたり」の授業に必要な条件

られる。それは、ある状況において自明の前提とされ疑うことのできないもの⁷」としている。

これまでの研究から、「ものがたり」を踏まえた授業づくりのあり方として、学習前の個の文脈を把握する重要性は確認してきた。今期は、生徒が題材や学習内容に対し、「自明の前提」としてどのようなとらえ方をしているのかに注目し、その変容をねらう「ものがたり」の授業構成を考えている。(図2中(A))

奈須(2017)は、「『科学的に正しい非常識』を生み出すことこそ科學の本質であり、科学のかっこよさなのではないでしょうか⁸」と述べている。「ものがたり」の授業によって、それまで題材に対して「自明の前提」としていたドミナント・ストーリー(「当たり前」や「常識」)が書き換わることを通して、各教科等の「見方・考え方」を働かせた「深い学び」につながるのではないかと考えている。

(2) 「自己に引きつけた語り」を生み出すための手立て

題材に対するドミナント・ストーリーの変容は、学んだことの知的な理解であり、それだけでは「ものがたり」の授業でめざす感性的な学び⁹にはつながらない生徒も多い。そこで、感性的な学びにつなげるために、題材に対するドミナント・ストーリーの変容が、自己と関係づくことをより重視する。(図2中(B))

そのために今期は、「自己に引きつけた語り」を以下のように考え、生徒が「自己に引きつけて」自らの学びを振り返る手立てについて研究を進めている。

「語り」

素朴概念や既有知識(既習事項)、自己の経験にもとづいて、複数の出来事の関連を筋立て、自分なりに意味づけ(結論づけ)たり価値づけたりする主体的な行為。よって、そこで「語られたもの」には、その意味づけ、価値づけのされ方に、一人ひとりの個人性が含まれる。

※ 「語り」は、語り手と聴き手の共同行為としてなされる。

※ 語り手と聴き手との相互作用(語り合い)によって、絶えず筋立ては再構成される。

「自己に引きつけた語り」

「語り」の中でも、特に出来事と自己との関連を見つめ、それを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

このような「自己に引きつけた語り」を、教科の授業だけでなく、学園運動会、送別芸能祭等の学校行事や、総合学習CAN、シャトルを含めた本校のカリキュラム全体を通して重視していくことで、生徒が学ぶことの意味や価値を実感し、「学ぶこと」と「生きること」がつながった本校生徒ならではの学びの「ものがたり」がつむがれていくと考えている。

7 野口裕二『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009、13頁

8 奈須正裕『資質・能力と学びのメカニズム』東洋館出版社、2017、127頁

9 学んだことの意味や価値の実感をともなう学び。特に価値の実感を重視しており、学習意欲の向上や学びが自己を形成する(自己の「ものがたり」をつむぐ)ことにつながると考えている。

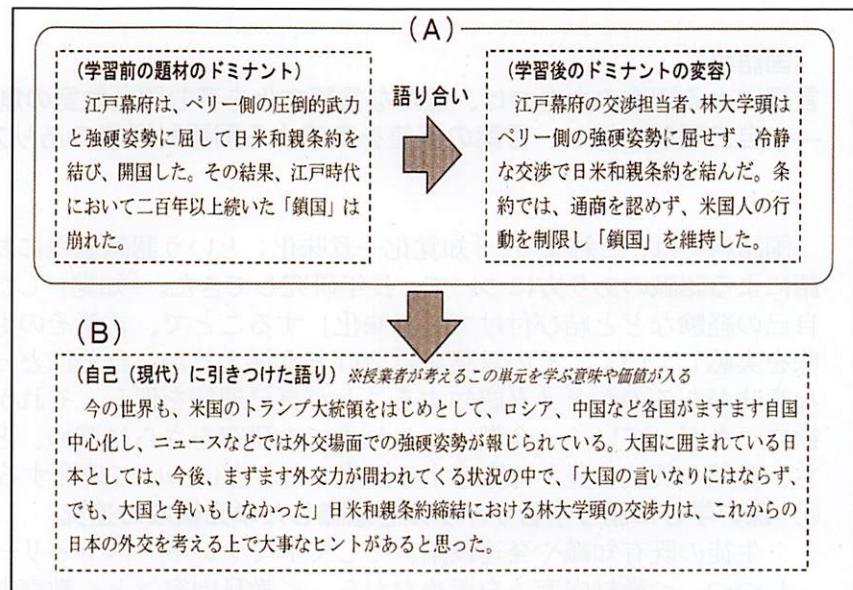


図2 「日米和親条約」を題材とした社会科の授業構想図

《国語科》

言語による認識の力をつける、豊かな言語文化を育む国語教室の創造
—自己理解を促し、言葉の価値を実感する国語科授業のあり方—



大西 小百合 田村 恒子

国語科では、これまで、「知覚化—意味化」という認識過程における言語による認識のあり方について、長年研究してきた。「知覚」した言葉を自己の経験などと結び付けて「意味化」することで、言葉そのものの意味を実感していく。その言葉を自分はどう捉えるか、自分にとってどんな意味があるのかとメタ認知することが自己理解を促し、それが学ぶ意欲につながっていく。今期は、これまでの研究をさらに深め、どの生徒も、言葉の価値を豊かに実感する授業のあり方について研究する。



① 深い学びに誘う学習サイクルを意識した単元構成の追究

生徒の既有知識や発達段階、そしてドミナント・ストーリーを考慮しつつ、
<教材内容>を深めながら、<教科内容>と<教育内容>を豊かに関連づけ、統合していく単元構成について追究していく。

② 学習者に<コンフリクト>(ズレ・葛藤・対立)を生じさせる学習課題・発問の検証

「わかっているつもり」になっている生徒の不十分さや、他者との考えのズレを明らかにできる学習課題や発問を研究する。そのコンフリクトが学習意欲を刺激する。

③ 「ものがたり」につながる語り直しを生み出す手立ての研究

なぜ、生徒はある特定の他者の語りに影響を受け、自らの体験と結び付けて語り直すことができたのか。その視点で生徒の振り返り等を分析し、有効な手立てを検証していく。

《社会科》

これからの社会のあり方を考える
生徒の育成をめざした社会科学習のあり方
—「今・ここ」を相対化し、再構成される
「社会的自己」の「ものがたり」を通して—



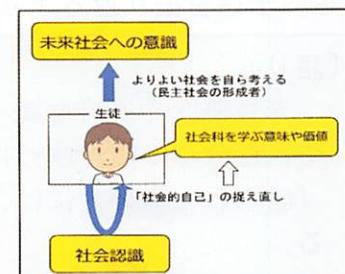
山城 貴彦 大和田 俊

民主社会の形成者の育成という社会科の目標に到達するためには、「今、私が生きている現代とは、どのような時代か」、「今、私が住んでいる地域には、どのような特徴があるか」、「今、私が生きている社会には、どのような制度が形成されているか」、つまり、「今・ここ」を捉えられないと、今後の民主社会を形成していくことはもとより、その方向性を構想することすら、子どもたちにとっては困難だろう。

このような、「『今・ここ』の社会に生きる私」を「社会的自己」と定義する。その「社会的自己」を捉え直す手がかりが、社会科で学ぶ社会的事象である。つまり、さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、それまで漠然としていた「社会的自己」の捉え直しにつながると考える。

一方で、民主社会の形成者に求められる資質・能力も時代とともに変化している。人工知能の急速な発達に代表される現代社会の大きな変化の中で、今後突きつけられるのは、「豊かさとは何か」「国家とは何か」「人間とは何か」といった、本質的な問いである。そういった本質的な問い合わせに対して、価値観や立場の異なる他者と協働して、こたえを模索し、つくりあげていく姿勢こそ、これからの中学生の形成者に求められる資質・能力ではないだろうか。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を目的として、研究を進めている。



【研究構想図】

- ① 自ら主体的に構成し、他者と語り合うなかで再構成される確かな社会認識の獲得
- ② 「今・ここ」の自己につながる普遍的なテーマを設定し「社会的自己」を捉え直す単元構成
- ③ 「社会的自己」の捉え直しを「ものがたり」で語り直す場の設定

《数学科》

数学とのより良い向き合い方ができる生徒の育成
— 数学化を意識した授業実践や振り返りを通して —



渡辺 宏司 山田 真也 大西 光宏

これまでの研究実践から、他者と対話し学び合うことで新たな疑問や気づきが生まれることや、振り返りや語り直しを通して、自己の中で、授業前後で自分や自分をとりまく世界に対する感じ方や考え方の変容が見られることも分かった。

しかし、現状は、答えを導くことだけが目的で機械的に問題を解いている生徒が多く、他者の解法との違いやよさは感じても、自分の解き方を貫いたり、十分理解せずに公式を使ったりしている姿がしばしば見られる。そのため、数学の学びに有用性を実感し、自己と関係づけて数学と関わるようになり、感性を伴う学びができるようにしたりする手立てが必要である。「授業だけでなく、日常生活の中で生き生きと数学的な見方・考え方を働かせようとする生徒」、「数学世界の中で、一般的・普遍的に成り立ちそうな事柄を予想しようとする生徒」を、数学とのより良い向き合い方ができる生徒の姿とし、今期は、次の3点を中心に研究を行っていく。



【課題解決に向けての対話場面】

- (1) 生徒が数学を学習するよさをより実感できる学習課題や、題材に対する考え方が変わるような単元構成の設定
- (2) 生徒が事象を数学化して数学的活動に意欲的に取り組むことができるための教師のかかわり
- (3) 生徒が自分の学びの課程を効果的に振り返られるような手立て

《理科》

自然事象から問い合わせを見いだし、自ら探究できる生徒の育成
— 科学する共同体の中でつむがれる「ものがたり」を通して —



鷲辺 章宏 山下 慎平

生徒は、科学することを大切にする共同体（科学する共同体）のなかで、自然事象から見いだした不思議や疑問、課題について、科学的に対話し、試行錯誤を繰り返すことで、自然の摂理や真理を解明する過程を学ぶとともに、自分をとりまく世界について理解を深めていく。そのなかで生まれた学びを過去の自分の経験や考え、感じ方とつなげながら振り返り、自然を改めて見直すことで、新たな視点で自然を捉え直すことのできる自分に気づく。そのような経験の積み重ねが、理科を学ぶことの「意味や価値の実感」につながり、学び続ける意欲を育む。理科において、学びの出発点は自然事象から問い合わせを見いだすことであり、それは自ら探究する生徒を育成する上でも重要である。しかし、自然事象から生まれた疑問を探究可能な問い合わせに変える力が、十分に育成されていないのが現状である。そこで、今期はこれまでの研究を引き継ぎつつ、次の3つを研究の柱とし、自ら問い合わせを見いだす力の育成と自然観の変容（理科の「ものがたり」）が生まれる学びを促すための手立てについて研究を行う。



【自分たちで立てた仮説を実験で検証】

- (1) 「自己に引きつけた学びを生むための単元構成の工夫」
- (2) 「自然事象から問い合わせを見いだすための教師のかかわり」
- (3) 「探究する力を育て、新たな問い合わせを見いだす振り返りの工夫」

《音楽科》

音楽の表現を追究し、音楽とのかかわりを深める学習のあり方
—音楽観の変容からつむがれる「ものがたり」を通して—



堀田 真央

音楽科では、音楽のよさや美しさを味わうことができる学習のあり方について研究を進めてきた。今期はこれまでの研究を継承しつつ、生徒が自己の表現の工夫について試行錯誤を行ったり、聴き取った音楽の特徴をもとに作曲者の意図について語り合ったりする学習、つまり、音楽の表現を追究していく学習をめざしていく。生徒たちが音楽の表現を追究したいと感じられれば、積極的に教材曲にかかわることが必然的に起こり、また、その中で学んだことが自己の音楽経験となれば、今後の音楽とのかかわりが深められるのではないかと考えている。音楽とのかかわりを深めるためには、学習の中で自己の音楽観（音楽に対する価値観）の変容も不可欠である。変容を生み出すためには、事前に自己の音楽観を意識させておくことが必要である。そして、授業の中で、これまで気づかなかった表現のよさに気づくことによって、自己の音楽観の変容を生み出していく。そのための手立てとして、以下の3点を研究の柱とし、研究を推進していく。

- (1) 自己の音楽経験と教材曲とのつながりを意識した題材構成の工夫
- (2) 表現の追究を深く行うための問い合わせの工夫
- (3) 音楽観の変容に気づくための語り直しの工夫



【手をたたいて休符の効果を感受する生徒】

【手をたたいて休符の効果を感受する生徒】

《美術科》

「創造活動」の喜びを見出す美術の学習
— 主体的に美術と関わる生徒の育成 —



渡邊 洋介

美術科では、創造活動の喜びを見出すことができる生徒の育成、自分らしい表現や味わい方ができる学習過程の工夫や支援の方法を探ってきた。

「創造活動」とは、表現と鑑賞の両方をさす。自分の見方や考え方をもとに創造することや、創造したものが他者に認められたと実感するとき、心から創造活動の喜びを見出すことができる。これは人間が本来持っている力であり、よりよく生きるために必要な要素であると考える。また、他者の喜びを共有し、認めることで、違った価値観を持つ他者を受け入れる力となり、これから社会を生きる生徒たちに必要な要素であると考える。これまでの研究で、「自分らしい表現や味わい方ができる」 = 「どんな表現でも味わい方でもよい」という捉えに留まり、主体的に喜びを見出そうとする姿が見られないという課題が生まれた。主体的に美術と関わり、喜びを見出すためには、より深い学びが必要である。そのための手立てとして、以下の3点を研究の柱とし、研究を推進していく。



【意見の違いに葛藤しながら最適な案を探る】

- (1) 非言語的・感覚的な経験を手がかりとした、表現と鑑賞を横断するような単元構成の工夫
- (2) コンフリクトに着目した、揺さぶりのある問い合わせの工夫
- (3) 作品の見方や感じ方の変化が見取れるような「ものがたり」の表現の開発

《保健体育科》

運動・スポーツの面白さに浸り、

豊かなスポーツライフの実現へつなぐ保健体育学習

— 運動・スポーツの本質を問い合わせ続ける共同体づくりを通して —



石川 敦子 徳永 貴仁



【気づきを仲間と語り合っている様子】

保健体育科では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するために、仲間とともに運動やスポーツの本質を問い合わせ続ける生徒」の育成をめざしている。そのために、運動の得意な生徒も苦手な生徒もそれぞれが一緒にかかわり、わかり、できるようになっていく喜びが実感できる授業づくりに取り組んできた。その結果、個やチームの実態に応じた技能の系統性を意識した指導を行うことができた。しかし、学習課題が適切であったか、その解決に向けて思考を伴ったかかわり合う場の設定は良かったのかなど、個が互いにかかわり合い高め合う集団になっていたかどうかについては課題が残った。そこで、今回は、集団の質が高くなることによって、もう一段高いレベルの集団「共同体」をめざしていきたい。その手立てとして、以下の3点を研究の柱とし、研究を行っていく。

- (1)運動やスポーツの面白さに浸る単元構成と問い合わせの工夫
- (2)かかわり合う中で学びの意味や価値を実感していく共同体づくり
- (3)心身ともに健康で豊かなスポーツライフへつながる「ものがたり」が生まれるための教師のかかわり方

《技術・家庭科》

よりよい生活を未来へつなぐ生活実践力を育む技術・家庭科教育

— 語り合い、実生活を見つめ直すことで生まれる

「ものがたり」を通して —



池下 香 渡邊 広規



【全体の場で生活の当たり前を語り合う】

これまで技術・家庭科では「振り返り—意味化—生活化」の授業に取り組んできた。前回大会から、自己の学びを「生活実践力」へ変容させることのできる生徒の育成をめざしている。その結果、題材を通しての振り返りで学んだことを「実行したい」と語り、学びが生活実践力に変容しつつある生徒が多く見られた。しかし、実際に学んだ知識や技術を「やってみる・使ってみる」場面をどのように設定していくか、またそれが生徒自身の生き方（生活）にどうつながっているのかを明確に分析できていないという課題が残った。

本校技術・家庭科が考える授業づくりの鍵は「生徒の生活での当たり前」をどう授業を通して変容させるかである。「生活に始まり、生活に返る」学びを根底とし、自分の生活を対自・対他という見方・考え方で捉え直すことが重要である。これまでの研究をふまえ、以下の視点で研究を行う。

- (1)多様な個の文脈から生活の当たり前を捉え、生活実践力へつながる題材構成と問い合わせ
- (2)生活者として、語り合うための場の設定と教師のかかわり方
- (3)自分の生活を捉え直し、自己の生き方（対自・対他）を見つめる語り直しの工夫

このような研究実践により、生徒の生活実践力を育み、自己の生き方へつなげたいと考える。

《外国語科》

コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造
— 主体的な言語活動から生まれる「ものがたり」を通して —



明田 典浩 伊賀 梨恵

これまで外国語科では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおいて研究を行ってきた。また、ことばの奥深さや多様性を実感するなど、言語や文化に対する理解を深めることで、コミュニケーションへの意欲につなげる実践も行ってきた。

今期も、引き続きコミュニケーションへの意欲に重点をおいて研究を行う。コミュニケーションへの意欲を高めるために、生徒が主体となって自分の意見や考えなどを積極的に伝え合う言語活動を単元に組み込む。その言語活動を通じての学びを、既存知識や経験と結びつけ、状況や相手に合わせて適切な英語表現を使用しなければならないといった、英語に対する新たな見方・考え方を獲得することを通じて、英語を学ぶ意味や価値を実感させたい。また、コミュニケーションの場面で欠かすことのできない即興でやり取りできる力も身につけさせたいと考えている。

そのためには、以下の内容を柱に研究をすすめる。

- (1) コミュニケーションへの意欲を高める学習課題の工夫
- (2) 即興で話す力を育む教師の支援の在り方
- (3) 英語に対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫



【英和辞典から学ぶ様子】

《学校保健》

人間性豊かで心身ともにたくましい子供の育成をめざして
— 養護教諭を中心とした教育相談のあり方と小・中連携体制づくり —



日本 亜矢

本校の過年度の研究において、ナラティヴ・アプローチの手法を用い、健康相談を実施したところ、生徒自身が問題を客観的に捉えることができ、自己を肯定的に捉えられることが増えていった。また、養護教諭、担任教諭、S Cが、それぞれにしかできない動きを大切にしながら、いかに効果的に連携していくか協議を重ねてきた。

今期も、保健室に来室する生徒に、ナラティヴ・アプローチの手法を用いた健康相談を実施し、教育相談後の体調や気持ちの変化を自覚し、自ら意思決定を行い、行動する力を身につけさせたいと考える。また、連携を小学校に広げ、養護教諭が行う健康相談の意味と養護教諭の役割を探っていく。

そのためには、これまでの研究をふまえ、以下の視点で研究を行っていく。



【小・中養護教諭が協議している様子】

- (1) 教育相談での養護教諭のかかわり方の工夫
- (2) 養護教諭、S C、SSWと連携した教育相談体制の構築
- (3) 小・中の連携体制づくりの在り方

総合学習シャトル

1 平成30年度（6月）における特設講座の実践

総合学習シャトル(以下シャトル)のねらいは、教科学習における活用と総合学習 CAN(以下 CAN)における探究とをつなぐことにある。今期は、CANとの関連性を踏まえて、一般講座と特設講座の実施時期を見直し、一般講座を CAN が始まる 1・2 月に、特設講座を CAN の探究が本格的に始まる 6 月に実施するように計画した。6 月に実施した特設講座では、生徒が 16 講座から 2 つの講座を選択し、必要なスキルの補充を行った(図 1)。

基礎的な力	講座名	具体的な内容
I 課題設定力	①発想法	ブレーンストーミング、KJ 法、など、発想方法スキルの習得
	②インタビュー、取材	インタビューを行うまでの手順と、必要なスキルの習得
	③アンケート	研究に必要なデータを収集するために実際にアンケート調査(質問紙作成など)を実施する
	④資料収集 A	過去の先輩の探究(先行研究)などから自分たちの探究課題を深めていく
	⑤資料収集 B	観察、フィールドワークなど、未知の中から自分で情報を集め、資料を作成する方法
	⑥情報の分析	実験や調査から得られたデータの間に、関係があるのかないのか、相関関係を探る技能の習得
	⑦データの見方・とらえ方	データの信頼性や妥当性についての概念の習得
	⑧情報の伝え方	「ミニ新聞」を作成することで、伝えたい情報を正確かつ端的に伝える技能の習得
II 課題追究力	⑨文章表現法	要約や項立て、文章の構成など、集めた情報を整理して、分かりやすく表現する技術の習得
	⑩プレゼンテーション 1	プレゼンテーションを行うのに必要な表現スキルの習得
	⑪プレゼンテーション 2	プレゼンテーションソフトの効果的な使い方や技能の習得
	⑫視覚化	情報を分かりやすく伝えるために、絵やグラフなどで視覚化する技術の習得
	⑬グラフの見せ方	目的に応じてグラフを効果的に表すスキルの習得 * 相関係数や相関図を中心に学習します
IV 自己評価力	⑭リフレクティング	グループワークトレーニングを通して振り返りのあり方を追究
V チームマネジメント力	⑮コミュニケーション	クラスターで探究が円滑に行われるコミュニケーションスキルの習得
	⑯リーダー養成研修講座	リーダーとしての資質、トレーニング。チームビルディング、チームマネジメントとは

図 1 30 年度実施の 16 講座



図 2 特設講座の様子

2 CAN2019 に向けて的一般講座の構想

今期の CAN における生徒たちのようすを振り返ると、探究の内容を端的に分かりやすく他者に伝えることや、自分たちの考え方や思い、感性などを交えて探究活動を振り返ることに課題が残った。そこで、今期の一般講座では、探究内容をまとめ、表現する場面において PREP 法を導入したり、探究活動を振り返る際にストーリーマップを用いたりする計画を立てている。

総合学習 CAN

1 平成 30 年 1 月～11 月 (CAN2018) の実践

CAN とは、Cluster (クラスター)、Action Learning (アクション・ラーニング)、Narrative Approach (ナラティヴ・アプローチ) の頭文字をとったものである。

【平成30年度 活動時期と概要】

総合学習シャトル・CAN					
時期	冬休み・1月・2月	3月・4月・5月	6月	7月・8月・9月	10月・11月
人数	1人CAN	2人CAN		3人CAN	
内容	個人で探究テーマを設定する	2人で意見を出し合い探究テーマを深化させる	中間発表会・シャトル特設で探究スキルの習得する	調査や実験など探究活動に取り組む・CANの日 I・IIを活用し外部の専門家を訪問し意見をもらう	研究成果をまとめ、文化祭等で発表・外部発信する

平成 29 年度の実践 (CAN2017) からの主な変更点は以下の通りである。

① 外部との連携を充実

多様な他者と対話し、自分の考えを伝えたり、質問を受けたり、評価されたりするなかで、探究内容や自分自身に対する新たな気づきが生まれる。昨年は、附属坂出小学校の 6 年生がプレ発表会に参加したが、CAN2018 ではさらに坂出高校の生徒も加わって実施した。また、6 月のオープンスクールで中間発表会を行い、早い段階で保護者から意見をもらったり、教育実習期間に CAN の日 II を実施し、大学生と一緒に活動に取り組んだりするなど、新しい視点から探究を見直す機会を設けた。さらに、11 月の末には青雲賞や校長特別賞、イグ青雲賞に選ばれたクラスターが小学校に出向き、5・6 年生の前で探究成果を発表した。発表後は、小学生から鋭い質問をたくさんもらい、発表した中学生達も大いに刺激を受けることができた。

② 最終論文集の充実

これまでの最終論文集は、CAN 賞や部門賞を取ったクラスターのものだけを選抜し、作成してきた。しかし、賞に選ばれなかった研究のなかにも、今後の研究の手がかりになるようなものがある。さらに、CAN 賞の生徒が発表会用に作成したスライドや CANLOG 賞の生徒が記述した CAN 物語も、今後 CAN を行う生徒に大いに参考になるものである。そこで、これらを最終論文集に成果としてきちんと残すようにした。

2 CAN2018 の成果と課題

右の図は、CAN 終了後に行った生徒アンケートの結果の一部をまとめたものである。どの学年も 8 割以上の生徒が探究活動に達成感を感じている。また、CAN の活動を通して、自分が探究してみたいという気持ちが 1 年生や 2 年生のなかに芽生えている様子もうかがえる。さらに、2 回に増やした CAN の日を利用して、専門家を訪問したり、実験や調査にじっくり取り組んだりするなど、CAN の日を有効に活用できるクラスターも増えてきた。

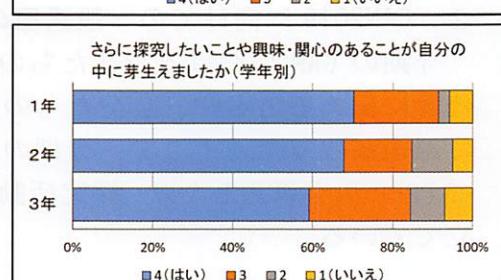
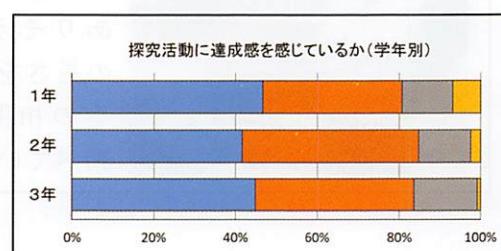
反面、課題として挙げられるのが、聴く・聞く活動である。以前と比べ、できなくなっていることがアンケート結果からも明らかになった。また、探究仮説を設定して探究活動を行うことが、探究の見通しを持ったり、新たな気づきを生んだりすることに有効だったという意見がある一方で、どのようにして探究仮説を設定すればいいのか分からぬという意見もあった。



【香川大学の教授から助言をもらう】



【小学校で探究成果を発表】



【生徒アンケートの結果（一部）】

3 平成 31 年の CAN2019 に向けて

生徒の探究活動をより深いものにするための、次期 CAN の重点事項は、以下の通りである。

- ① 偏りがちな課題の視野を広げ、個性を生かした多様な探究課題の設定のあり方を探る
- ② 探究仮説を設定し、見通しをもった探究活動を行うための教師の関わりや手立ての工夫
- ③ シャトルや CAN での発表や AL 会議などを通して、聴く・問う活動を充実させる
- ④ CAN の日を増やし、外部との連携や探究活動をさらに充実させる

これらの重点項目を中心に改善を行い、学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」としてさらに進化させていきたい。

3年生の CAN 物語より(一部抜粋)

3年間の CAN を振り返って、1年生の時は、何をしているのかわからないくらい、新しいことばかりで、2、3年生の先輩が助けてくれたおかげで CAN の学習について学ぶことができました。最初の頃の私は CAN に対して、難しくて面倒だなとずっと思っていました。しかし、2年生になってその考えは 180 度変わりました。CAN って楽しい！と思うようになりました。後輩がいる初めての CAN だったということもあるし、外部の専門家に話を聞いたりすることで、自分たちが「いい」と思ったものを作り上げていく楽しさを実感できたからだと思います。でも私は、1番今回の CAN が好きです。2年生までの経験を生かしながら、3人で試行錯誤を繰り返している時が、数学で難しい問題が解けた時よりも何倍も楽しい時間だったからです。中学校3年間でこういう経験ができた事に、今感謝しています。

ありがとうございました。

後輩へ。私は3年生になって後輩と CAN をする大切さを知りました。今まで同じ学年の友達とやった方が絶対楽しいのにと思っていたが、後輩が頑張っているから自分も頑張らなくちゃと思ったことが何度もあります。そのおかげでお互い高めあうことができたし、私のクラスターは奨励賞という素晴らしい賞をいただくことができました。何度も失敗しても、後悔しても、あきらめずに自分らしく CAN という学習を頑張ってください！応援しています。



すなおに語れる空間づくり

対話による深い学びを生み出すためには、自分の考え方や思いを互いにすなおに語ることができる場が欠かせない。そこで本校では、相手に意識を向ける取り組みを重点的に行い、「応じる」ことができる生徒の育成に取り組んでいる。帰りの会で取り組んでいるスピーチでは、聞き手が話し手の考えを引き出すように質問をする形式で行っており、生徒アンケートの結果のように、生徒が自分の考えをすなおに語る姿が見られた。今後は、このスピーチでの生徒の姿が各教科の授業でも見られるようになるために、話し手の語る力を高めたいと考えている。そのため、スピーチの行い方を少し変え、まず話し手が 1 分間自分の考えを語ってから聞き手が質問するような取り組み方に変更した。このように、帰りの短学活や道徳など様々な場面を活用して、授業中でも堂々と自分の考えを語ることのできる生徒の育成に取り組んでいきたい。



【自分のお気に入りの本を紹介】

「聞き手の質問で、自分の思いや考えが語られていますか？」



- 理由
- ・自分が言いたかったことを上手く聞き出してくれた。
 - ・自分が想像していなかった質問がくることで、
 自分で気づけなかつたことに気づけた。

相手の考え方を引き出す質問の入力欄

考える観点 基本は **5W1H** いつ?どこ?だれ?何?なぜ?どう?した?
(何)は?

① **感情を問う!**
(例)「一番、楽しかった（苦しかった、感動した、印象に残った等）こと
(何)は?」

② **発表者の答えを引用して問う!**
(例)「……ということでしたが、○○○○?」

③ **自分と違う!を問う!**
(例)「自分だったら……だけど、どう?」

みんなで 質問して いこう!

【質問する意識を高める掲示物】

研究文化の醸成

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学习、キャリア教育の一環として実施している。研究者として第一線で活躍されている先生方から、CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学部	講師	内容
教育学部	櫻井 佳樹	教育について、人間について哲学してみよう
法学部	肥塚 肇雄	人工知能で走行する自動運転車による事故は誰の責任なの？
経済学部	Ravindra R. Ranade	経済学 文科系も理科系も
医学部	清水 裕子	国際看護教育学における「ケア」の視点～カンボジアにおいて～
工学部	上村 忍	類は友を呼ぶ～物質と物質の間で起こる現象と分子の動き～
農学部	川浪 康弘	化学の考え方を分子模型で体感しよう

2 親子セミナー

岡田倫代先生（高知大学大学院）より「親子のあたたかいコミュニケーションを育むために」という演題で、思春期の子どもの特徴と上手なコミュニケーションの取り方について等、多くのご示唆をいただいた。生徒、保護者それぞれに訴えかける内容で、話に引き込まれていった。



あとがき



副校長 石川 恭広

本年度は、教育研究発表会を6月8日に開催し、県内外から700名を超える多くの方々の参加を得て、貴重なご指導やご意見をいただきました。教職員一同、心より感謝申しあげます。

現在、国立大学は大学改革を全国的に推し進めており、附属学校もその存在価値が強く問われています。そのため私たちは、「ふるさと香川の学校教育に貢献するには、どのような取組や教育研究を行えばよいのか」「先生方に『附属はなくてはならない。ありがたい。』と思ってもらえるにはどうすればよいのか」など、附属学校としてのあり方を模索しています。その答えの1つとして、公立の先生方ともっと密着し、授業づくりのノウハウを共有しながら広げ深めていくことができる研究でなければならないと考えています。

本校研究のキーワードは「ものがたり」の授業づくり。そのねらいは、学びの意義や価値を実感させ、生涯にわたって学び続ける強い意欲のある生徒を育むこと。これは、どの先生にとっても共通するめざしたい授業の方向ではないでしょうか。今後、ねらいに迫ることができる授業づくりのノウハウを具体的に示していくよう、地道な実践努力を重ねて参ります。

今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげます。

編集委員

大和田 俊 山田 真也
山城 貴彦 鷺辺 章宏
渡邊洋往 堀田 真央
徳永貴仁 田村 恒子
山下慎平

平成31年2月20日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL/0877-46-2695 FAX/0877-46-4428
E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp